ディプロマ・ポリシーをより深く　知るために

ディプロマ・ポリシー（学位授与方針）は、どのような力を身につけた者に卒業を認定し、学位を授与するのかを定める基本的な方針です。本学医学部がディプロマ・ポリシーに掲げる能力や資質について3年生が医学部長へインタビューをしました。

鬼原　紫万
Kihara Shima
医学部医学科第3学年
札幌光星高等学校出身
一般選抜（先進研修連携枠）

島津　大和
Shimazu Haruto
医学部医学科第3学年
北嶺高等学校出身
学校推薦型選抜（先進研修連携枠）

医学部長
齋藤　豪
Saito Tsuyoshi

◆ディプロマ・ポリシー 1
倫理観・社会的責任、プロフェッショナリズムに関する内容（態度）
高い倫理観・責任感を備え、医療者としての使命感をもって患者の立場を重視するとともに、研究マインドをもって医学・医療に生涯を通じて貢献できる。

◆ディプロマ・ポリシー 2
地域医療、研究、国際貢献に関する内容（関心・意欲）
幅広い視野をもって積極的に地域医療を担う意欲を育み、先駆的研究に関心をもって国際的な医学・医療の発展に貢献する。

◆ディプロマ・ポリシー 3
基本的医学知識と基本的技術、コミュニケーション能力に関する内容（知識・技能）
基本的な医学知識と技術を習得し、協調性と指導力をもって診療や保健指導、医学研究を実践できる。

◆ディプロマ・ポリシー 4
問題解決・課題探求能力に関する内容（思考・判断）
現状に潜む問題点を課題として提起し、科学的根拠および適確な方法に基づく論理的思考を通して自ら解決できる。

鬼原：まだ病院実習などを経験していないので具体的にイメージすることが難しいのですが、札幌医科大学の地域医療における取組にはどのようなものがあるのでしょうか。

学部長：札幌医科大学の臨床講座はそれぞれの地域に関連病院を有しており、そこに教室員を派遣することによって、地域の医療を維持しています。また、各医師は地域でさまざまな症例を経験し、成長して教室に帰ってきます。これがまさに地域医療です。札幌医科大学ではこの流れを大切にしながら、地域に医師を循環させるという役割を担っています。

島津：ディプロマ・ポリシーでは、地域医療と国際的な医学・医療の発展に貢献することが挙げられています。医学生、そして医師として、私たちはどのように両立できるのでしょうか。

学部長：地域医療と先進的・国際的な医療はもともと相反するものではなく、両方とも医師の養成に欠かせないものです。一人前の医師になるためには、患者さんを見て経験を積み、自ら学び、あるときには周りに教えてもらいながら自分を鍛えていくことが重要ですが、その基盤を作り上げるフィールドこそ、地域医療であると考えています。そうして成長した先に、国際的・先進的な医学・医療が見えてくるので、「両立できるのか」と心配する必要はありません。

鬼原：札幌医科大学に入学して学んできて、臨床と研究が密接に関連していることを実感してきました。私は今、臨床と研究両方に興味があるのですが、一人の医師が臨床と研究を両立することは可能でしょうか。

学部長：それぞれの講座は地域医療を行いながら研究活動も行っており、さらに臨床講座はそれぞれのテーマの中で基礎講座と深くつながっています。所属する講座により、多少の方針の違いはありますが、「臨床に力を入れたい」「研究に力を入れたい」「臨床である程度経験を積んでから大学院に行きたい」など自分の意志を示すことが大切です。自分がいつごろ、どのようなキャリアを築いていきたいかを明確にし、上司の先生と相談すれば、十分に両立は可能だと思っています。

鬼原：「研究」に関連して、札幌医科大学にはMD-PhDコースがありますが、学生のうちから研究することにはどういった意義があると思いますか。知識や経験がない学生に、研究ができる自信がないのですが。

学部長：近年、大学を卒業しても初期臨床研修・専門医研修で忙しく、なかなか基礎研究に触れる時間が取れないため、若い医師が研究に携わる機会が減ってしまう傾向にあります。そこで、比較的時間に余裕がある学生時代に、基礎研究の面白さ・大変さを経験してもらうために、MD-PhDコースが設置されました。一度経験してみて「やはり臨床」となるかもしれませんが、面白さに気づけるかもしれません。まずは経験してみるということを大切にしていただきたいと考えています。

島津：医師に求められる高い倫理観とプロフェッショナリズムを修めるために、私たち医学生には何ができるのでしょうか。

学部長：倫理観を身につけるのは難しいことですが、「地域包括型診療参加臨床実習」などの際に、地域の医療従事者の方と接したり患者さんと交流したりする中で、将来医師になる自覚を少しずつ育んでいくことが大切だと考えています。また、学生生活を送る中で、自身の行動や判断を定期的に振り返り、継続的に自己研鑽に努めるトレーニングを積むことも大切です。

島津：実際に病院見学に行ってみると、講義で学んだことがどのように臨床とつながっているのかよく分かるのですが、講義だけでは、臨床とのつながりが見えにくい部分があります。日々の学びをより臨床で活かすためには、どのような姿勢で講義に臨むことが大切でしょうか。

学部長：今学んでいることが、何の役に立つのかを常に考えながら取り組むことが大切だと思っています。私が医学生だった時代は、臨床実習が始まるまではすべて座学で、国家試験合格のために必要な知識を詰め込むという教育でした。そのため、学生時代に学んだことが何の役に立つのか、医師になってから知るということも少なくありませんでした。

しかし今は、低学年のうちから講義と並行して実践的な授業を取り入れ、講義と臨床のつながりが見えやすくなるよう、大学として努力しています。

鬼原：私が受験生のときにLEAPを読んだ際、疑問に思ったのですが、ディプロマ・ポリシーの中にある「幅広い視野をもつ」とは、具体的にどのようなものなのでしょうか。

学部長：非常に抽象的で難しい問題ですが、医師にとっては「人の立場に立って物事を考えること」こそ「幅広い視野をもつ」ことだと考えています。将来、医療チームのリーダーとして他職種の医療従事者をまとめる必要があるかもしれません。また、患者さんは、これまでの人生で出会ったことがないような人かもしれません。そんなとき、いかに相手の立場に立って考えることができるかが重要だと考えています。その人たちの気持ちがわからなければよい医療が出来ないのは当然ですよね。決まった集団の中で生活することが多くなりがちな学生生活ですが、意識的に部活動やボランティア、旅、趣味を通じてさまざまな人と付き合うようにした方がよいと思います。